

生徒との心豊かな関わりを目指して

篠崎 保夫

(千葉県立君津商業高等学校)

1 はじめに

昭和 47 年に商学部に入學，3 年次修了後に，文学部英米文学科に編入し昭和 53 年に卒業。学生時代は，1 年次に英語部(ESS)に所属し，その後仲間と共に LSE という英語サークルを設立し，活動する。6 年間英語漬けの毎日，文学部 4 年次に英検 1 級を習得する。

卒業と同時に，千葉県立高校の英語教師として教壇に立ち 35 年，平成 26 年 3 月で定年を迎える。先輩教師や同僚から学んだこと，失敗したこと，悩み苦しんだことが，少しでも参考になれば，そして教育とは何か，教師とは何かを考える機会となれば，幸甚の極みである。

2 教師の仕事とは

「教師は言うまでもなく教科の授業が出来て教員である」という事を，教師になる前は思いがちであり，私もそう考えていた一人である。

しかしながら，実際の教師の仕事は，それだけでは終わらない。

私が，35 年の教師生活で感じた最大の教師の仕事は，生徒との関わりにあると確信する。生徒一人ひとりとどう関わっていくのか。その根底にある教師の気持ちは「目の前の一人の生徒を幸福にしたい」との強い気持ちが肝要であると思う。

先輩教師がいつも言われたことは，「教育の根本目的は何か。それは『子供の幸福にある』。今日の教育の混迷の最大の要因は，この，何のための教育かという，原点が見失われていることのように思える。子供は，教師が自分の幸福を願っていることを感じてこそ，信頼もし，心を開くのである。また，子供の幸福を真剣に考えてこそ，初めて子供の性格も，才能も，問題点も見えてくるのです。」人間として，まだまだ発展途上である私にとっては大変に含蓄のある言葉であり，実行の難しいことではあるが，自分なりに教師としてこの言葉を胸に秘め教育活動に携わってきたつもりである。

●生徒との関わりを振り返って

いろいろな生徒が教室にはいるが，その生徒の生い立ちや生活環境などは千差万別であり，深刻な問題を抱えた子供たちも多くいる。しかも，問題の根をたどれば，家庭や社会に行きあたらずるを得ないのである。

私の経験した学習困難校と言われる学校では特に，生活環境が大変な中で育ってきた生徒が多くいた。母子家庭や父子家庭，両親がいない家庭。更には，文章にできない壮絶な生活環境の中で生きている生徒にも会った。そんな彼らの生活が乱れたりするのを，どう考えるのか。表面的には，指導してもなかなか指導に乗らないことが多く，「あの生徒がいなければ，うちのクラスは,,,」という言葉を発する教師がいる。本気で言っ

ているのではないと思うが、残念なことである。人間として完全な生徒などいないだろう。いろいろな問題を抱えて学校に入ってきているのだ。子供たちの幸福を真剣に考えて彼らと関わる日々を送ろうと努めてきた。

① I君の例

高校では、校則に触れる問題行動を起こすと特別指導がある。学校にもよるが、問題行動の内容によって、学年主任説諭、教頭説諭、学校長訓告、家庭謹慎、退学勧奨まである。例えば、喫煙では4日間の家庭謹慎。私も何度も特別指導の生徒を持ったが、家庭謹慎といっても母子家庭であったり、夫婦共働きであったりで、家庭謹慎が出来ない生徒が多く、学校謹慎をするケースが近年は増えている。学校謹慎となると授業や校務分掌があるなかでの指導となるので、教師にとってはとても煩雑な時間となりがちである。しかしながら、この学校謹慎は生徒のことを知る絶好のチャンスでもある。

その事を実感したのは赴任2校目のK高校(県下でも有数の学習困難校だった)で、I君の喫煙行為での特別指導の時である。学校内謹慎をしている部屋から私の準備室に彼を呼び、コーヒーを飲みながら、好きな食べ物や趣味など話題にし、彼の普通の生活の話をした。特別指導とは全く関係のないことを話題にした。生徒ではなく人間として彼と関わるようにした。「人間として、だれが『優れて』いるのか。それは人の痛みを分かち合える『優しさ』を持つ人ではないだろうか。」との言葉を実践しようとしての対話だった。彼の思い、彼の悲しさを知らなくては、本当の関わりはできないと思い、彼と対等の対話をしようとした。口数の少ないそして、すこし心の荒んだ生徒ではあるが、次第にぼつりぼつりと話し始めた。彼には離婚のために母親がおらず、三交代勤務の父親との二人暮らしであった。朝は、自分で起きなければ学校には遅刻、欠席。当然朝食は抜き、昼飯も父親からもらう小遣いでコンビニ弁当を購入。小遣いを貰えない時には、昼も抜き。高校生の彼は、家庭の愛情を受けることもなく、さびしい思いをして毎日を送っているのだと痛感した。喫煙をとがめるよりも、彼の生活状況の大変さに同情し、心からの激励をした。

しかし、彼の生活態度は残念ながら容易には変わりようがなく、遅刻欠席が増えていく。彼の自宅(会社の社宅)にも何度となく家庭訪問し、連絡の取れない(現在のようにはまだまだ携帯電話が普及していない時代)父親にもやっとお会いし、彼の学校での状況を話す。そして、家庭において彼へのできる限りの激励と指導をお願いする。父親は、奥様がいないこともあり、心底生活に疲れ切っているためか、息子の将来について深く考える余裕がない様子。

高校は義務制ではないため、欠席が法定時数の3分の1を超えると進級・卒業ができない。彼も欠席がきわめて厳しい状況になり、毎朝彼の家に電話を入れる。しかしながら、電話に出ることはほとんどなし。ついに数教科が欠課時数をオーバーし、赤点になる。当時この高校は、補講をして追認試験を受けさせ、及第点を取れば単位を認定するシステム。他の3年生は卒業試験が終了し家庭学習に入り、彼だけが登校し、補講を受けることとなる。この補講に欠席すれば、認定はあり得ない。その日の補講が終わると、時間を割いて準備室に彼を呼び、お茶を飲みながら対話。今が頑張り時であることを祈るような気持

ちで話す。結果的には、卒業の認定を許可され、校長室で一人だけの卒業式を行う。校長より卒業証書授与、学年の先生方が校歌を歌う。同じクラスの生徒たちからの花束を渡すと、彼は照れながら嬉しそうな笑顔を見せる。彼なりに頑張ったことに対して、校長はじめ学年の先生方も祝福の言葉を贈る。私にとっては、長い教員生活の中でたった一度の経験ではあるが、忘れることのできないI君の思い出である。

② クラス通信を通じた生徒との関わりの例

話は前後するが、このK高校で学年主任を終えたその次年度の学年編成の時に、2学年の担任の話があり、生徒数24名の2年E組の担任を引き受ける。前任校でも自分の担任したクラスに名前を付けていた(後述)が、2年生のクラスには「夢集団」3年生のクラスには「THE火山」と命名する。そして、生徒と生徒、生徒と担任、保護者と担任の交流のために、クラス通信を発行。そのクラス通信の名前は、2年次は「SHOUT」3年次は「VOLCANO」。クラス通信は、24名全員にカラー印刷で渡す。こちらからの一方的な伝達ばかりでなく、出来る限り生徒たちの声を載せる。何か行事がある度にその感想などを纏め、また頑張った事等があればその記事を載せる様に努める。クラス通信を配ると、生徒たちは、自分の感想や友達の気持ちを興味深く読んでいた。また、クラスの掲示板には毎回のクラス通信を1枚ごと掲示し、1号から最新号までが一目で分かるようにした。

さて、上記のI君と同様に、笑顔が素晴らしいHさんも私のクラスに在籍していた。Hさんは、中学時代に重大な交通事故に遇い、両足を同時に地面から離すことができない障害を負う。従って、走ることは全くできない状況。また、人前で話すことも苦手で教室などで彼女の声を聞いたことはない(ほんの数人だけにはほとんど聞こえるか聞こえないような声で会話をしているとのこと)。母親の話では、彼女の学校の様子からは信じる事が出来ない事だが、家に帰ると大きな声で家族とはよく話をするとのこと。彼女の担任になり、どうしたら自信を持って生活ができるのか、声を出して人前で話すようになれるのか、悩む。英語の授業を持っていたが、彼女を指名しても返事は出来ず、全く声を出して英語を読むことも出来ない。私は、焦らず、授業中のプリントのチェックの時やLHRの時に個人的に彼女に声をかける。初めは簡単な質問(昨日の日曜日はどこかに行きましたか等)にさえ声を出して答えることも出来なかったが、徐々に笑顔で「はい」「いいえ」の意思を表すようになる。

そして、このクラス通信を通して彼女を激励できないかと思っていた時に、願ってもないことが2年生の6月に起きる。それは、「学校案内」というパンフレットの中で、制服が変わったことを紹介するために、生徒をモデルとした写真を載せるというもの。モデルになる生徒を募っていたので、私のクラスのHさんを紹介すると彼女が選ばれる。その事をクラス通信12号に次のように掲載。「Hさん!スーパーモデルで衝撃のデビュー(ヘッドライン) 夢集団のHさんが、学校案内の中で制服を紹介する写真のモデルになった。(中略)本校を紹介する学校案内に掲載され、多くの人目に留まる事になり、モデルの道が待っているかも!?!お疲れ様!!」後日Hさんの母親とお会いし、ご家族一同この記事がとても嬉しかったと伺う。

さらに、Hさんの部活動に関する事が耳に入っている。そのことをクラス通信13号に次のように掲載。「Hさん弓道で華麗なるデビュー! (ヘッドライン) 先月の6月13日(日)に開催された第52回千葉県高等学校総合体育大会の弓道大会に、わが夢集団のHさんが初参加。(中略)顧問の平野恵子先生からは、初参加にしては上々の出来、良く頑張ったと声が届いている。部活動に参加する生徒が激減している本校で、部活動に汗を流す姿は貴重である。放課後弓道場において、黙々と練習に励んでいるHさんの姿をいつも目にする。その姿に、高校生の凛とした清々しさを感じている生徒職員も多い。これからも、高い目標を持って進んでいってほしい。」

12号13号と連続してHさんを掲載できたことは、偶然とは言え本当にタイミングが良かった。私が、この記事の事を話すとHさんも本当に嬉しそうに微笑む。心の中に自信が芽生えたと思う。そして、もうひとつ彼女に関する大きなエピソードがある。それは、体育祭の時のクラス全員リレーのことである。このリレーはクラスの全員が一人の走る距離に関係なくグラウンドを2周(と記憶している)走らなければならない。Hさんは、既述したように、同時に2つの足を地面から離す事ができない。そこで、彼女をリレーの先頭走者にし、直ぐに2番手に渡せるように皆で考案。最終的にはこのリレーで上位入賞はできなかったが、爽やかに終わることができ、生徒たちが成長していることに担任として感謝の気持ちでいっぱいになる。体育祭の感想としてクラス通信に彼女は次のように書いてくれた。「体育祭は予定通りできたからよかったと思う。(中略)全員で、リレーしたのは、みんな一生懸命走ったからよかった。」小さな記事ですが、彼女の安心した心が伝わり、教師として本当に嬉しく思う。

高校生となると、担任がなかなか生徒との関わりの時間を取る事が出来ない現状があるが、このクラス通信を通して生徒と担任、さらには生徒と生徒が知らず知らずのうちに交流していたのではないかと思う。その結果が、2年生2月のマラソン大会での優勝につながったと思う。クラス通信第30号に載せた私の思いと生徒の感想の抜粋を紹介したい。

「マラソン大会大変お疲れ様でした。そして、優勝おめでとう。この団体優勝は、君たち一人ひとりの努力の結果です。団結の結果です。どうか自信を持って、『夢集団』は学校で一番頑張ったと語ってください。優勝の因は一人の欠席者もなかったことと、皆が自分の力を発揮した事だと思います。普段から、欠席が少ないということが今回の快挙につながったと思います(しかし、遅刻は結構多いぞ。これがなくなれば言う事なし)。また、真面目に走った結果だと思います。本当に、皆で力を合わせればこんな事ができるのですね。これからも、いろいろな事があると思いますが、皆で団結するときは団結して、素晴らしい思い出を作ってください。(後略)平成12年2月7日 夢集団・団長 篠崎保夫」

「(前略)マラソン大会が終わって体育館の表彰式で、見事2Eが優勝して驚きを隠せなかった。でもいい記念ができて良かったと思う。K「疲れた。でも疲れるとわかっていても全力で走っている自分に結構感動した。メダルも賞状ももらえなかったけど、10番以内に入れて良かった。たぶんクラス優勝したという事は、皆本気で走っていたのだなあと思った。C「優勝できたことは、皆が一生懸命頑張ったからで、ただ一人の力ではない。こ

れからも色々な行事で頑張りたいと思う。来年はないけど、悔いのない走りができてよかった。S」「素直に言うと疲れた。クラス優勝はびっくり。何かゴチしてもらいたい気分だ。とにかく自分は頑張った。皆速ええー。足いてえー。あとは修学旅行だ。J」

その他多くの生徒の感想がクラス通信となり生徒たちの目に触れることになる。この第30号のクラス通信の発行までに、29枚のクラス通信を発行。その29枚のクラス通信を通して彼らはお互いを知り、いつの間にか心が通うようになったのではないかと。

24名(1名は遅れての一人だけの卒業式になったことは既述しました)全員が卒業式を迎えることが出来た。これも「夢集団」「THE 火山」に関わりご指導くださった先生方、保護者の方々、その他の多くの方々の存在があったらと思う。しかしながら、2年間で発行された枚数は多くないが、総数56号のクラス通信の存在が大きかったと思う。クラス通信を通しての生徒との交流の醍醐味を2年間の発行ではあるが、実感する事が出来た。

ここで今回のクラス通信を通して感じた良い点(工夫した点)と悪い点(注意すべき点)を重複する点もあるが、まとめてみたいと思う。

○ 良い点

- ① 教師と全生徒、全生徒同士の交流がしやすい。上手にクラス通信を活用し、生徒同士の交流、教師と全生徒の交流を深めたい。しかしながら、教育の原点は「対話」にあると思う。デンマークの”近代教育の父”グルントヴィとコルの師弟が目指したのが”生きた言葉”による「対話の教育」の実践であった。スイスの大教育者ペスタロッチも、「対話」を重視した。クラス通信はあくまでも「対話」に至る橋渡しである。クラス通信を出しているから、生徒との心の交流ができていると思うのは、危険である。日頃の「声かけ」をしっかりと実践していきたい。
- ② 文字として残る上に、教室の掲示板に長く張っておけば忘れる事がなくなり、いつまでも感動が続く。
- ③ 教室の明るい雰囲気作りに役立つ。
- ④ 日頃目立たない生徒にもスポットライトを当てる事が出来る。小さなことでもその生徒ならではの活躍なり頑張りがある。文字化することにより生徒は喜びを持つことができる。
- ⑤ 普段注意されることが多い生徒に汚名返上の機会を与えることができる。一人の生徒でも欠点もあれば、長所もある。普段はダメだと言われている生徒が、何かの場面では大活躍する事がある。その事を紙面に載せることで本人も自己肯定感を持つことができる。
- ⑥ 書くのが苦手、他人に見られたくないという生徒もいるので、ペンネームも自由に使える。ペンネームにも個性が表れ、それ自体に生徒は関心を寄せる。
- ⑦ 良い点になるか、悪い点となるのか判断に苦労するところだが、生徒自身の文章表現を尊重することが大事。教師からこの表現は使わないとか、おかしいという指摘は出来る限りしない(他の生徒を傷つける表現は直すようにはした)。彼らのその時代を生きた感性が大事。

○悪い点(注意すべき点)

- ① 記事が特定の生徒に偏らないようにする。活躍に関しての原稿は、目立つ生徒に偏る傾向が出がちである。日頃の職員間の交流から情報を収集する事が大切。

3 工夫考察シートの活用について

教員生活が長くなるとどうしても忙しさに忙殺され、目の前にある問題に対して創意工夫をして解決しようとする姿勢が弱くなりがち。考えてはいるが、忙しさ故に(確かに教育活動は際限がなく、忙しい日々だと思ふ)考えが纏まらず、今までの実情に甘んじていた。

その時に、ある先生が工夫考察シート(ABCシートとその先生は呼んでいた)を教えてくれた(企業によってはこれに似たものを実施している。またブレイン・ストーミング (brain storming) もこの変化型と言えるかも知れない)。それは以下のようなものである。

A	B	C

Aの欄には、現状や悩んでいること(現状掌握)を詳しく書く。

Cの欄には、こうしたいと思う事(達成内容)を詳しく書く。

Bの欄には、AをCにする手だて(工夫や手段など)を思いつくままに書く。

Bについて大事なことは、思いつくままに書き込むこと。

ここで、私のABCシートの実践例を紙面の都合で1つだけ紹介したい。

●実践例 文化祭：クラス企画「百万本のバラ」

高等学校では文化祭を開催するところがほとんどだと思うが、私も担任をして生徒と共に参加してきた。しかしながら、生徒が積極的に文化祭の行事に関わり、大きな達成感を持って終えることができないのが残念であった。

このABCシートを早速実践してみた。

Aの欄には、下記のような事柄があがった。

- 生徒が積極的に文化祭行事に関わろうとしない。
- 自分達で何をやろうかと考えない。
- 参加する生徒が僅かで、本当の意味で団結して行動できない。
- 準備時間が少なくなり、手抜きで当日を迎えてしまい、達成感を持った文化祭にできない。
- 行事を通して成長できない(リーダーが育たない)。

Cの欄には、下記のような事柄があがった(Aの裏返しになるが)。

- 生徒が積極的に参加し文化祭行事を楽しんでいる。
- 何かさらにできないかを考えている。
- 仲良く団結して、生徒それぞれの個性や能力を活かして行事に関わっている。

- やり切ったという思いで行事を終える。
- 他の生徒の良い所や自分の良さを発見し、皆が自信を持つようになる。
- このクラスが好きになる。
- 皆が力を合わせれば、考えられないほどの事を成就できることを知る。

Bの欄には日々の思考を重ねて、次のような事柄があがった。

- ① 11月の文化祭であるが、7月から早めに行事に取り掛かる。企画を考える様に指示し、企画案が出ない場合は、こちらから提案する。
- ② クラス企画のイメージを眼でわかるようにし、早めに仕掛ける。
- ③ 団結を強めるために、クラスに独自の名前をつける。
- ④ LHRと自習時間を積極的に活用し、達成感を持てるようにする。
- ⑤ 実行委員会を明確に作り、それぞれの役割を明確にする。

Bからの具体的な展開

- ① 7月に入って直ぐに、今年の文化祭の企画を考えようと生徒たちに提案し、3日後のLHRにそのことを話し合おうと約束。

3日後のLHRで生徒からの意見を聞く時間を持ったが、これといった企画案がなし。

そこで、私から「百万本のバラ」の提案。この企画は教室を私達の作った造花で埋め尽くすというものだと熱く語る。生徒たちは、あまり興味を示さずそんな事が出来るのか、面白くないという雰囲気。

- ② 生徒たちに刺激を与える、つまり企画の内容が少しでもイメージ出来るようにするために、7月のある日の放課後に数名の生徒を呼び、造花の材料で、トルコキキョウ、バラ、ポピーなどの造花を作る（きちんと作れないとなるところで計画は挫折してしまうので、私は自宅で事前にしっかり練習）。生徒たちは、マニュアル本を見て苦労しながら時間の経つのも忘れ、造花作り。ツルの籠に、できた造花を綺麗に飾りつけ。その後、教室にある教卓の真上の天井からその造花の籠を吊す。翌朝、登校してきた生徒たちの多くは「綺麗だね」「なんだ、これは!!」と言って、関心を示す。私は「これは、おれたちの秋にやる文化祭の企画だ。ほんの手始めだよ。」と告げる。造花作りをした生徒たちは、にやにやと笑う。生徒たち全員は、毎時間、この花籠を目にすることとなる。

また、私達のクラスの授業担当者も、教卓の真上に飾られている花籠に気付き、様々な激励や刺激を頂く。担任だけではなく、多くの先生方から声をかけられる状況を作れたことは、この花籠の思ってもみなかった効果。

- ③ 長い夏休み後の9月。最初の日HRの時に、教室の壁に「夢集団」という紙を張り出す。私は「今日から、このクラスは1年D組ではなく『夢集団』とする。宜しく。」と話す。放送でクラスの生徒を呼び出すときも「夢集団の〇〇君」とする。また、私の作成した定期試験の問題用紙の標題にも（1年A, B, C, 夢集団, E, F組用）と書く。彼らも次第に「夢集団」という言葉に愛着を持つ。

- ④ いよいよ2学期。教室の床中を花で埋めるには、途方もない数の造花が必要。LHR

の時間や他の教科の自習時間を貰い、造花作り。列毎に材料を渡し、1列でこの時間で〇〇本というように具体的な作成数を伝え、造花作りに当たる。皆でやっているとの気持ちが芽生え、文化祭本番が近付くにつれて、企画はどんどん膨らむ。教室の床は、造花でいっぱいにするが、3面ある壁をどうするのが、話題になる。1面は、カナダのエリー湖の絵にしようとなり、美術部員のKさんが中心的に担当。もう1面は、^{千の風車}風車を全面に飾ることとなる。3千以上の風車を全員で作った。食品用の発砲スチロールを板状に切り、段ボールにその発砲スチロールを貼り、さらにその上に白い模造紙を貼る。それを壁にくくり付け、規則的に風車を刺して飾りつけ。段ボールや発砲スチロールを近所のマーケットから貰い学校まで運ぶこと、その発砲スチロールを洗浄し板状に切ることなどは特に大変な作業。生徒は今の作業がどうなるのか見えているからだと思うが、特に反発もなく作業する。今まで経験した文化祭での生徒の動きとは、大きく変わっていた。

さらに、教室内に木を入れて飾ろうという企画が持ち上がる。かなり大きな木を教室内に持ち込み立てたが、葉は枯れているので、白厚紙を葉の形に切り、マーカーで七色に塗り木に飾りつけ。生徒達は、この木に「レインボーツリー」と名前をつけ「この木の前で写真を撮ると、幸せになれます」というメッセージの看板を作成。

そして文化祭の前日、風車の壁への飾り付けが終了。するとある生徒が、「風車は回らないと面白くない。扇風機で風を送ろう。扇風機が丸見えでは、味気ないから、俺が飾り付けをするよ。」と言い出し、仲間と共に千代紙で花を作り、段ボールに飾り付け。私は、壁一面の風車がくるくる回る様子を見て、違った意味で感動する。普段は行事などに協力的でなかった生徒の自発的な行動に嬉しくなる。

いよいよ文化祭当日、教室は床一面に花が咲き乱れ、天井には、「レインボーツリー」の葉が生い茂り、壁の一面にはエリー湖の巨大絵画が展示され、その壁の向いの壁には3千を超える風車が回っている。教室に来られた方々や他のクラスの生徒たちは一斉に感嘆の声を上げていた。生徒たちは、自分達の今までの努力が報われ自信あふれる顔をしているように私には見えた。文化祭が終了し、その文化祭企画の表彰の発表があり、「夢集団」は最高賞の「企画優秀賞」を受賞。そのアナウンスを聞いて、休みがちだったA君が「当然だよ」と言った。文化祭は、二日間の学校行事ではあるが、その行事の成功のために三か月を費やしてきた。この文化祭を通して、生徒たちに「やればできる」という意識が芽生えたと、彼の言葉を聞いて確信する事ができた。

⑤ この文化祭企画の実施にあたり、次の実行委員会を作る。

・企画係 ・材料調達係 ・装飾係 ・受付係

4 終わりに

35年間、生徒と関わってきた中で感じることは、生徒と教師間により深い心の交流と対話があれば、より快適な人間関係を築くことができるということだと思ふ。その基本となる事は、「教育の根本目的は生徒の幸福にある」と心に定め、一人の生徒を「子ども」とみるのではなく一人の人間とみることではないだろうか。教師は教員の狭い「物差し」で生徒を見がちである。人間は皆違うのに、「1つの物差し」で生徒を切り捨てることのあるのではないだろうか。何という傲慢。何という無慈悲。「子ども」のくせにという関わりではなく、生徒を信頼し抜いていく関わりが肝要だと感じる様になった。このことは教育現場のすべての場面で言えることだと思ふ。生徒は「無限の可能性を秘めた未来からの使者」であり「まさに後生畏るべし」と心得ていきたいと思ふ。そのことを確信できたときに、「教育」ほどロマンに満ちた職業はないと思ふ。真摯に生徒と関わろうとの思いがある限り、どんな問題が起きた時も、工夫考案シートの活用を持続していくことができると確信する。

私の体験は拙いものでありますので、どうか皆様の周りの素晴らしい教育活動をされている先生方から多くを学び、実践していただければと思ひます。

これから先、何十年と教職に携わる方々に、未来の使者の教育をお願いしつつ、またご健闘を祈ります。